連載Ⅰ
あの町この町
第57回

蔵造りとパソコン――茨城県・結城市

ドイツ文学者・エッセイスト
池内　紀
（イラスト＝著者）

幕末・維新期は激動の時代であって、いたるところでさまざまな事件があった。なかでも下総（しもうさ）・結城（ゆうき）藩で起きたことは特筆ものだろう。藩主が自分の城を攻めて占拠し、奪回されると城を脱出、江戸・上野の杜（もり）に身をひそめた。

結城市を訪ねる前に下調べをしていて、そんな一件と出くわした。はじめは何のことかわからなかったが、くわしく知って納得した。めまぐるしく政局が変化するなかで、珍しいとはいえ、たしかにありえたこと。ただし、土地の歴史と風土に結びついており、表面だけの経過で判断すると、とりちがえる。さしあたり現地を歩きながら、ゆっくり考えるとしよう――。

ハラをきめてＪＲ結城駅に降り立ち、駅前の風景に目を丸くした。城下町結城――結城紬（つむぎ）――蔵造りの町。そんなふうに聞いていた。ところが駅前右手にガラスとパイプと鉄骨の巨大なビルが、お城のようにそびえている。結城市民情報センターといって、図書館、ホール、交流施設などを兼ねている。前に突き出たのが観光物産センターで、駅からガラス張りの連絡通路が通じている。

うかつにも週に一度の休館日に来あわせたようで、全館の明かりが消え、

見世蔵の通り

林立したパイプだけが白々と光っている。観光物産センターもひとけがなく、「ようこそ　ゆうき」のガイドマップがカウンターに見えるが、もとより中に入れない。未練げにのぞきこんでいると、うしろから声をかけられた。観光マップをお求めならおゆずりしよう。振り返ると、気のやさしげな青年で、自分はこれから体験学習に行くところ。仲間がいて地図は不要だから、これをどうぞ。

おもいがけず「ようこそ　ゆうき」が手に入った。本場結城紬の「はたおり体験」をグループで申し込んだという。草木染の教室もあって、そちらもやってみるそうだ。地図には「つむぎの館」とあって、ボールペンでマルがついている。市中の問屋街にあって、すぐにわかる。超近代的なビルの前で、古めかしい問屋街への行き方をおそわった。

肝入町、白銀（しろがね）町、陣屋町、番匠町、石（こく）町、紺屋町……。地図には昔ながらの町名が並んでいる。旧城下町におなじみだが、道路が直線ではなく、ゆるやかにうねっており、足にここちいい。やにわにカギ形に曲がったりしてたのしいのだ。そんなメインストリートを歩いていて、なぜかすがすがしい。先ほどの親切の余韻だろうが、もっと直接的にまわりが明るいせいである。そのうち、通りによけいなものがないからだと気がついた。店頭には「お茶処」「薬舗店」「新聞店」など職種と店名を告げる標識があるだけで、広告看板といったものがない。よく見ると「屋外広告物　重点モデル路線」の表示がある。モデル地区として規制をかけたとみえる。

「やればできるジャン」

うれしくなって、ヨダレクリのような言葉を呟いた。

右に一つ、左手に一つ、右にまた一つ、重厚な建物があらわれた。玄関わきに銘板がとりつけてある。多くが「国登録有形文化財」で、建てられた年、建築様式、特色などが添えてある。おおかたが火事に強い蔵造りスタイル

を採用しており「見世蔵」ともいうらしい。創業元禄十一年の御菓子司は、赤穂浪士の討入り前から饅頭をつくってきた。何の商いか、「カネキチ」のロゴを染めつけたノレンに「創業天保二年」とある。

干瓢問屋

㋕櫻井長太郎商店

ピカピカに磨き上げたガラスに、「干瓢」と桜の旧字が並び立ち、屋号のマークが金色に光っている。奥ではパソコンが事務処理をしていても、店がまえは寸分変えない。商品の干瓢が変わらないのと同じである。瓢は「ふくべ」「ひさご」「ひょうたん」の意味だが、干瓢はたしかウリではなく、ユウガオの実をひも状にむいて干したものだとおそわった。煮て味をつけたのを巻きこんだのが干瓢巻き。急にあの素朴なのりまきが食べたくなった。

問屋街に近づいたようで、通りが特有の雰囲気をもっている。洋品店に小さく「勉強の店」とついている。ある年代以上でないと、何の「勉強」だかわかるまい。

織物の町であって問屋街があるのはわかるが、機織の音がしないのはどうしてか？　これもまた下準備をしてきたので、おおよそは知っていた。そもそもの成り立ちと関係しており、結城地方は常総台地といって鬼怒川と飯沼川のあいだに盛り上がったところにひらけている。水に乏しく米づくりが難しい。そのかわり養蚕が盛んで、古くは「絁」と書いて「あしぎぬ」といった。太くてあらい糸で織った粗製の絹布である。絁は常陸国の特産だった。それが洗練され、高級化して結城紬が生まれた。当地は江戸時代に一時、幕府の直轄地となり、代官が赴任してきた。初代関東郡代伊奈忠次は有能なマネージャーだったのだろう。製品の改良をはかり、「結城縞紬」の名で売り出して、結城モノを全国最上の紬として定着させた。

「つむぎの館」はすぐに見つかった。明治年間創業の卸問屋が蔵を開放して資料館、陳列館、はたおり、染の教室に活用している。「本場結城紬」とアタマに「本場」がつくのは、伝統的な工程によってつくられたもので、大幅に機械化した製品と区別してある。組合の合格証に必ず「本場」が入っている。

わざわざ名のるだけあって、これはおそろしく手間と時間がかかるのだ。繭の煮出しから始まって、強い糸をとるための「真綿かけ」、糸つむぎ。ふつう糸は撚りをかけてつくるものだが、結城の糸は世界でも類をみない無撚系で、一反分の糸をつむぐのに二、三ヵ月かかる。つづいて管巻き、糸あげ、染色、下糊づけ、機のべ、墨つけ、絣くくり。絣の柄になる部分に染めが及ばないよう綿糸でしばるのが「絣くくり」。一つの柄に二〇〇～四〇〇箇所をしばらなくてはならず、これだけで三ヵ月はみなくてはならない。くくり終えたのをたたき染めして絣ほぐし。これでようやく工程の半ばをこしたぐらいなのだ。実際のギッコンバッタンに至るまでが、気が遠くなるほど長い。工場生産に合いっこないのである。「結城は欲しいけど高いから」とよく言われるが、「合格」に至るまでの作業を考えるとバチが当たる。

通りに面した蔵の一つがカフェになっていて、おいしいコーヒーとケーキがいただける。いかなる建築家が手をかしたものか、古い建物があざやかに改造されて、趣味のいい味のある空間が生まれた。階段づたいに二階を見せてもらったが、こちらは旧型をそのままのこしていて、かつての棟梁の手わざを鑑賞できる。生活上のすべてが、とめどなく技術によって加速される時代にあって、およそ反時代の精神と手職美をつらぬいている。ほかにも紬の里、本場結城紬郷土館、

結城市伝統工芸館、手作り工房などが伝統のワザを伝えている。四年前のユネスコ無形文化遺産登録は地道な積み上げと技術の高さへのゴホービなのだ。

旧城下町のつねで寺や神社が多い。寺の一つに「小場兵馬自刃の跡」の標示がついている。もしかすると幕末の争乱で切腹した家老ではあるまいか。

直轄地時代が終わり、元禄十三年（一七〇〇）、結城藩が成立。水野家が譜代大名として封じられた。十代目、幕末の藩主水野勝知はコチコチの佐幕派だったが、国許では家老を中心に恭順に傾いていた。もはや徳川の時代ではないと見きわめをつけたわけである。

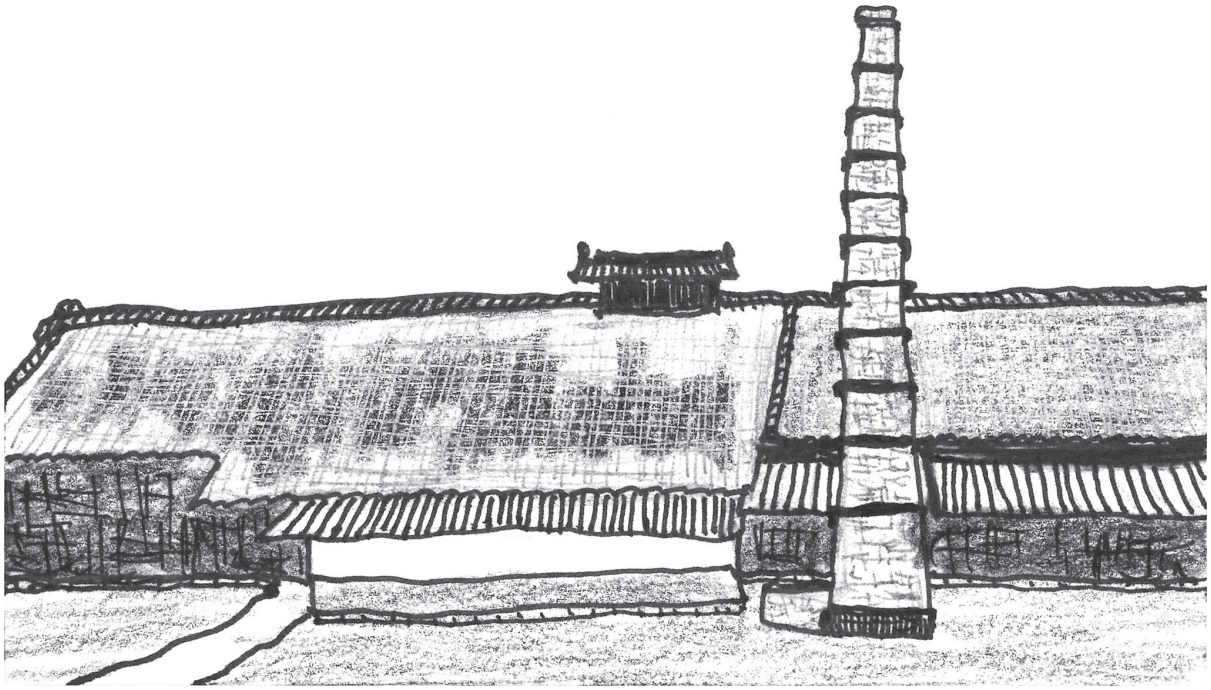
慶応四年（一八六八）は明治元年でもあるが、その年の三月、江戸にいた藩主は国許恭順を知って激怒し、みずから「水心隊」を結成。彰義隊や会津兵を率いて東山道を進み、結城城を砲撃して占拠した。翌四月、政府軍が奪還。藩主は城から逃走して上野山内にひそんだ。結城藩家老は殿の尻拭いで切腹。

知られるように明治維新のあと、政府軍と幕府派の同盟軍のあいだで戊辰戦争が起きた。徳川への恩義を主張して武士の意地にこだわったあまり、城もろとも城下も炎上したケースが少なくない。長岡、会津若松は、もっとも苛烈な結果をみた。

結城藩の家老は藩主の意向を無視して政府軍受け入れ策をとった。為政者として状況を判断した上の正しい決定であって、おかげで城下町は戦火にあわず、犠牲者も出なかった。

市中のあちこちに蕪村の句碑がある。句友砂岡雁宕をたよってきて、十年あまり滞在した。

秋のくれ仏に化る狸かな



地酒の蔵元

お城下の外れには狸やムジナが出没していたらしく、いまも寺の並ぶ一角に狸堂があり、「化け地蔵」が端座している。放浪の俳人にかぎらず、結城地方にはさまざまな人が往きかいしていた。奥州街道のほかに鬼怒川の水運があり、極上の紬は江戸商人にとってドル箱のブランドであって、番頭や手代が卸問屋へ表敬訪問にやってくる。旅人や商人や廻国の僧を通じて最新の情報が入ってきた。江戸表の藩主の先見えのなさを危ぶみながら、国許の幹部たちは新時代の到来を、はっきり感じとっていたにちがいない。

そういえば行政が町の要所に「付属庁舎」というのを設けていて、そこには「結城市適応指導教室」「フレンド〝ゆうの木〟」「出会いサポートセンター」などが入っている。それぞれ方向はちがっても、いずれも時代の動向を見てとっての「適応」とサポートのための窓口と思われる。駅前に超近代的ビルとして「市民情報センター」をこしらえたのも、そんな流れのこと。情報の館こそ現代の城なのだ。

タウンマップには「民」や「酒」や「染」や「寺」のほかに「選」の字が星のようにちらばっている。民話関係、酒の蔵元、染物、寺社、それに「結城百選」の意味で、町のおすすめスポットである。とりたてて探さなくても、足の向くままに歩いていると、おのずと行きついて、薬師さまの前に来たり、糀味(こうじ)噌蔵の横に出たり、民話の伝える九尾の狐と出くわしたりする。歴史を保存しているだけでなく、上手にそれを現代に生かしている。市中だけでなく、かつて鬼怒川水運の河岸であったところがスポットに入っていて、百選が一〇〇で足りず、総計一一八。

野菜・果物の店先に白菜が石垣のように積み上げてある。常総台地はかつては一面の桑畑だった。養蚕の衰退を見てとり、白菜づくり

に切りかえた。鍋物に欠かせない冬野菜の代表であって、しかもトラック便を使えば首都圏はごく近いのだ。一千万都市の鍋物を下総産が一手にまかなっている。

梨、トマト、とうもろこし、ぶどうも結城特産のつぶよりで、目のいい先覚者がいたらしく、いち早く桑から果樹に転作した。この点でも保守的な城下町ではなく、情報と商人の町の伝統がはたらいていたのではなかろうか。

城跡は町外れにあって、小振りの石垣だけがのこっている。城の規模とくらべて城下が広いのは、町方（まちかた）が力をもっていたからで、織物のブランドを中心とする富の蓄積が蔵造りの立派な町並みをつくりあげた。

県道が旧市街へ入るところに、雄大な瓦屋根と赤黒いレンガの煙突が、ひときわ異彩を放っている。タウンマップにはただ「酒」とだけあるが、古くから結城の酒として親しまれてきた醸造元である。裏手の寺からながめると、煙出しをもつ大屋根の半分は、黒っぽい瓦と白っぽいのとがモザイク状の模様をつくり、のこる半分は整然と白っぽく光っている。東日本大震災で醸造蔵が破損し、屋根瓦の多くが大きくズレたり落下した。半分は修復ですんだが、のこりの半分は新しく葺き直した。ひらたい平面にすると運動場になりそうなほどの大屋根であって、はたしてどれほどの修復費を要したものか。天災をいいわけにして、手のかかる瓦屋根を取り壊し、鉄とコンクリートの機能型に乗り換えるのがふつうだろうに、そっくり元通りにしたところが江戸創業の老舗のスゴイところである。

赤レンガの煙突は明治三十六年（一九〇三）に造られたもので、高さ十メートル、地下に煙道がのびて釜場と結ばれている。百年以上を経ても大揺れにビクともせず、町の人々はスックと立つ赤黒いノッポの君（きみ）に、ずいぶん力づけられたらしいのだ。

駅近くの結城観光物産館でその地酒の小壜を求めたところ、係のおばさんが抱くようにかかえて、「おいしいお酒」と言った。大屋根の修復がタイヘンだったのではと訊くと、こっくりうなずいた。現社長はもともと東京の大会社の技術者だったが、親のあとを継ぐためにもどってきた。

「ときおり立ち寄ってコボされますね」

老舗の蔵元に生まれ合わせたばかりに、人生がままならない。下降一方の日本酒業界にあって、なおさら苦労が多いだろう。あれだけの大屋根を元どおりにする大旦那の一方で、物産館のおばさんに身の行く末をコボすところがほほえましい。

気がつくと日が暮れかけていて、外燈が明るくともっている。「宿」のマークの一つへ向かって、急にひとけのなくなった裏通りを歩いていった。まっすぐ進んだつもりが、通りが半円状に曲がっていたらしく、めざしたところと反対の通りに出てしまった。寺の甍（いらか）の上に細い月がかかっている。蕪村の友人雁宕の句にあった。

寺々の古いすずりやけふの月

市中のどこかで句碑をメモしたばかり。それはたしかだが、さて、どこだったか。お昼すぎ、ほんの数時間前のことなのに思い出せない。結城紬と同じように、ここには長い時間が生きている。ひたすら宣伝して加速する効率社会のなかで、よけいな広告看板のない街は、うれしい別天地というものだ。それとなく、これからの観光のあり方を示しているのではなかろうか。

（いけうち　おさむ）